

## 中国語訳『雑宝蔵経』の言語

長尾 光之

## 目次

- |        |            |        |                                   |
|--------|------------|--------|-----------------------------------|
| 0.     | 序          | 6.3.2. | 躬自, 身自, 独自, 心自, 親自, 手自,<br>私自, 各自 |
| 1.     | 疑問文        | 6.3.3. | 徒自, 素自, 而自, 深自                    |
| 1.1.   | 疑問詞        | 6.4.   | 当, 応, 須, 宜, 必, 定                  |
| 1.2.   | 文末の不       | 6.5.   | 復                                 |
| 1.3.   | 不審         | 6.6.   | 善能                                |
| 1.4.   | 那          | 6.7.   | 皆                                 |
| 1.5.   | 為, 為当      | 6.8.   | 却後, 然後, 其後, 隨後                    |
| 2.     | 得          | 7.     | 重複形式                              |
| 3.     | 与          | 8.     | 量詞                                |
| 4.     | 著          | 9.     | その他                               |
| 5.     | 代名詞        | 9.1.   | 受動態                               |
| 6.     | 二音節語と二字連語  | 9.2.   | 縱使, 仮使                            |
| 6.1.   | 即, 便       | 9.3.   | 子, 頭, 辺, 裏                        |
| 6.2.   | 時          | 10.    | 終りに                               |
| 6.3.   | 自          |        |                                   |
| 6.3.1. | 即自, 便自, 既自 |        |                                   |

## §.0. 序

『出三蔵記集』巻二に「宋明帝時, 西域三蔵吉迦夜, 於北国以偽延興二年, 共僧正釈曇曜訳出, 対劉孝標筆受」とある記載が正しいとすれば, 『雑宝蔵経』は北魏延興二年, すなわち A. D. 472 年に吉迦夜・曇曜が共訳し, 『世説新語』の施注者として知られている劉孝標が筆録した漢訳仏典である。『出三蔵記集』・『歴代三蔵記』は十三巻, 『開元釈経目録』は八巻としているが, 現存本は十巻に分かたれている。『雑宝蔵経』には長短さまさまの因縁譚・比喻譚が 121 篇収録されており, 大多数は仏教説話(アヴァダーナ, ジャータカ)に類した形式を取っている<sup>1)</sup>。すなわち

1. 現在物語
2. 過去物語
3. 連結

の三部分から一篇が構成されている。現在物語は

どういう場所でどういう機会に話がなされたかを述べ, 過去物語は過去におこったできごとを比喻として述べる部分である。つぎに連結で, 過去物語の登場人物は実は仏や仏の高弟, 仏への敵対者などであったと結びつける。現在物語と連結は仏典としての形式をととのえるために習慣的につけ加えられているもので, 仏典の説話的側面というところから見てゆくと, 2. の過去物語の部分が主要な構成部分なのである。また各篇のなかでも過去物語の占めている部分が分量的にもっとも多い。

『雑宝蔵経』の題目は以下のとおりである。

(なお引用する際にはこの通し番号を用いる。テキストは大正大蔵経第四巻, 本縁部下を用いた)

- (1) 十奢王縁(十奢王のはなし)
- (2) 王子以肉済父母縁(王子が肉によって父母を救うはなし)
- (3) 鸚鵡子供養盲父母縁(おうむの子が目のみえぬ父

- 母をやしなうはなし)
- (4) 棄老国縁 (老人を棄てる国のはなし)
- (5) 仏於忉利天上為母摩耶説法縁 (仏が忉利天で母マヤのために説法をするはなし)
- (6) 仏説往昔母迦旦遮羅縁 (仏がむかしカタンシヤラーを母としたはなし)
- (7) 慈童女縁 (慈童女のはなし)
- (8) 蓮華夫人縁 (蓮華夫人のはなし)
- (9) 鹿女夫人縁 (鹿女夫人のはなし)
- (10) 六牙白象縁 (きばの六本ある白象のはし)
- (11) 兔自焼身供養大仙縁 (うさぎがみずから身を焼いて仙人に食べさせるはなし)
- (12) 善悪彌猴縁 (善い猿と悪い猿のはなし)
- (13) 仏以智水滅三火縁 (仏が知恵の水で三つの火を消すはなし)
- (14) 波羅捺国有一長者子共天神感王行孝縁 (パラナ国の長者の子が天神とともに王を感嘆させ孝行をするはなし)
- (15) 迦尸国王白香象養育父母并和国縁 (カシ国王の芳香を持つ白象が目のみえぬ父母をやしない、二つの国を仲善くさせるはなし)
- (16) 波羅奈国弟微謙兄遂徹承相勸王教化天下縁 (パラナ国で弟が兄をいさめ、兄は承相と王にすすめて天下を教化させるはなし)
- (17) 梵摩達夫人妬忌傷子法護縁 (梵摩達王の夫人が子供の法護をねたんで傷つけるはなし)
- (18) 駝驛比丘被謗縁 (比丘の駝驛がそしられるはなし)
- (19) 離越被謗縁 (離越がそしられるはなし)
- (20) 波斯匿王醜女頼提縁 (波斯匿王のみにくい娘、頼提のはなし)
- (21) 波斯匿王女善光縁 (波斯匿王の娘、善光のはなし)
- (22) 昔王子兄弟二人被騙出国縁 (むかし兄弟の王子が国をおわれたはなし)
- (23) 須達長者婦供養仏獲報縁 (須達長者の妻が仏にほどこしをし報いを得るはなし)
- (24) 婆羅那比丘為悪生王所苦惱縁 (比丘の婆羅那が悪生王に苦しめられるはなし)
- (25) 内官曠所健牛得男根縁 (宦官が去勢されそうな牛をたすけ男根を得るはなし)
- (26) 二内官諍道理縁 (二人の宦官が道理をあらそう話)
- (27) 兄弟二人俱出家縁 (兄弟が二人とも出家する話)
- (28) 仇伽離謗舍利弗等縁 (仇伽離が舍利弗たちをそしめるはなし)
- (29) 竜王偶縁 (竜王の偈のはなし)
- (30) 提婆達多欲毀傷仏因縁 (提婆達多が仏をきずつけようとするはなし)
- (31) 共命鳥縁 (共命鳥のはなし)
- (32) 白鵝王縁 (白鵝王のはなし)
- (33) 大亀因縁 (大亀のはなし)
- (34) 二輔相詭譎縁 (二人の大臣ざんげんのはなし)
- (35) 小鷄王縁 (小鷄の王のはなし)
- (36) 吉利鳥縁 (吉利鳥のはなし)
- (37) 老仙縁 (老仙人のはなし)
- (38) 二估客因縁 (二人の商人のはなし)
- (39) 八天次第問法縁 (八天が順に法を問うはなし)
- (40) 貧人以麩団施現獲報縁 (まずしい人が麦粉の団子を施して現世で報いを得るはなし)
- (41) 貧女以両銭布施即獲報縁 (貧しい女が二銭を布施してすぐに報いを得るはなし)
- (42) 乾陀衛国画師闍那設食獲報縁 (乾陀衛国の画師闍那が食事を施して報いをえるはなし)
- (43) 闍夷羅夫婦自売設会現獲報縁 (闍夷羅夫婦が身売りをして会席を設け現世で報いを得るはなし)
- (44) 沙弥救蟻子水災得長命報縁 (沙弥がアリの水難を救い長寿の報いを得るはなし)
- (45) 乾陀衛国王治故塔寺得延命縁 (乾陀衛国王が古い仏塔を修復して寿命をのばしたはなし)
- (46) 比丘補寺壁孔獲延命報縁 (比丘が寺の壁の穴を補修して寿命がのびる報いを得るはなし)
- (47) 長者子見仙求長命縁 (長者の子が仏に会い長命をねがうはなし)
- (48) 長者子客作設会獲現報縁 (長者の子が人に雇われながら会席を設け現世で報いを得るはなし)
- (49) 弗那施仏鉢食獲現報縁 (弗那が鉢いっぱいのお食事をほどこし現世で報いを得るたとえ)
- (50) 大愛道施仏金縷織成衣并穿珠師縁 (大愛道が仏に金糸で織った衣服を施したこと、および王造り職人のはなし)
- (51) 天女本以華鬘供養迦葉仏塔縁 (天女が以前に花のかみかざりで迦葉の仏塔を供養したはなし)
- (52) 天女本以蓮華供養迦葉仏塔縁 (天女以前にレンゲで迦葉の仏塔を供養したはなし)
- (53) 天女受持八戒齋生天縁 (天女が以前に八戒を受持して天にうまれ変るはなし)
- (54) 天女本以然燈供養生天縁 (天女が以前に灯明を燃して供養し天にうまれ変るはなし)
- (55) 天女本以乘車見仏歡喜避道縁 (天女が以前車から仏を見、喜んで道をゆずったはなし)
- (56) 天女本以華散仏化成華蓋縁 (天女が以前仏に花をまいて花のおおいとしたりはなし)
- (57) 舍利弗摩提供養仏塔縁 (舍利弗摩提が仏塔を供養するはなし)
- (58) 長者夫婦造作浮図生天縁 (長者夫婦が仏塔を造って天にうまれ変るはなし)
- (59) 長者夫婦信敬礼仏生天縁 (長者夫婦が仏をうやまつて礼をし天にうまれ変るはなし)

- (60) 外道婆羅門女学仏弟子作畜生天縁（外道の婆羅門の女が仏の弟子に学んで畜をおこない天にうまれかわるはなし）
- (61) 貧女人以氈施須達生天縁（貧しい女が毛布を須達にほどこし天にうまれかわるはなし）
- (62) 長者女不信三宝父以金銭雇令受持王戒生天縁（長者の娘が三宝を信じないので父が金で娘を雇い五戒を受持させて天に生れかわらせたはなし）
- (63) 女因掃地見仏生歡喜生天縁（娘が掃除しているとき仏を見て喜こんだため天にうまれかわったはなし）
- (64) 長者造舎請仏供養以舎布施生天縁（長者が家を作り仏を呼んで供養をし、その家を布施として天にうまれ変わるはなし）
- (65) 婦以甘蔗施羅漢生天縁（妻が甘蔗を羅漢にほどこして天にうまれ変わるはなし）
- (66) 女人以香塗仏足生天縁（女性が香を仏の足に塗り天にうまれ変わるはなし）
- (67) 須達長者婢婦依三宝生天縁（須達長者の下女が三宝に帰依して天にうまれ変わるはなし）
- (68) 貧女從仏乞食生天縁（貧しい女が仏に食物を乞い天にうまれ変わるはなし）
- (69) 長者婢為主送食値仏即施獲報生天縁（長者の下女が主人に食物を運ぶとき仏にあい施しをして天にうまれ変わるむくいを得るはなし）
- (70) 長者為仏造講堂獲報生天縁（長女が仏のため講堂を作り天にうまれ変わるむくいを得るはなし）
- (71) 長者見王造塔亦復造塔獲報生天縁（長者が王が仏塔を作るのを見て自分も造り天にうまれ変わるむくいを得るはなし）
- (72) 買客造舎供養仏獲報生天縁（商人が建物を作って仏を供養し天にうまれ変わるむくいを得るはなし）
- (73) 帝釈問事縁（帝釈天が問うはなし）
- (74) 度阿若憍陳如等説往日縁（阿若、憍陳如らに昔のことを説くはなし）
- (75) 差摩子患目婦依三宝得眼淨縁（差摩子が目をわずらい三宝に帰依してなおるはなし）
- (76) 七種施因縁（七つのほどこしのはなし）
- (77) 迦歩王国天早浴仏得雨縁（迦歩王が干魃の時仏をゆあみさせて雨を得るはなし）
- (78) 長者請舎利弗摩訶羅縁（長者が舎利弗、摩訶羅をまねくはなし）
- (79) 婆羅門以如意珠施仏出家得道縁（婆羅門が如意珠を仏に施して出家し道を与えるはなし）
- (80) 十力迦葉以実言止足血縁（十力迦葉が本当のことを言っただけで仏の足の血をとめるはなし）
- (81) 仏在菩提樹下魔王波旬欲來惱仏縁（仏が菩提樹の下にいた時魔王の波旬が仏を悩ませようとするはなし）
- (82) 仏為諸比丘説利養災患縁（仏が比丘たちに利養災患を説くはなし）
- (83) 賊臨被殺遙見仏歡喜而生天縁（賊が殺されるとき遠くに仏を見て喜び天にうまれ変わるはなし）
- (84) 別手足人感念仏思而得生天縁（手足を切られた人が仏恩に感じて天にうまれ変わることができたはなし）
- (85) 長者以好蜜漿供養行人得生天縁（長者が好い蜜汁を通行人に供養して天にうまれ変わるはなし）
- (86) 波斯匿王遣人請仏由為王使生天縁（波斯匿王が人を派遣し仏を招いたために、王を天にうまれかわらせたはなし）
- (87) 波斯匿王勸化乞索時有貧人以氈施王得生天縁（波斯匿王が物を乞うことを勧めたときあるまずしい人が毛布を王にほどこして天にうまれ変わるはなし）
- (88) 兄常勸弟奉修三宝弟不敬信兄得生天縁（兄が常に三宝をたてまつることを弟に勧めたが弟はうやまわず兄が天にうまれ変わる事ができたはなし）
- (89) 父聞子得道歡喜即得生天縁（子が道を得たことを聞いて喜こんだ父が天にうまれ変わったはなし）
- (90) 子為其父所逼出家生天縁（子が父に出家をせまられ天にうまれ変わったはなし）
- (91) 羅漢祇夜多驅惡竜入海縁（羅漢の祇夜多が悪竜を海に追い払うはなし）
- (92) 二比丘見祇夜多得生天縁（二人の比丘が祇夜多を見て天にうまれ変わるはなし）
- (93) 月氏国王見阿羅漢祇夜多縁（月氏国王が阿羅漢の祇夜多に会うはなし）
- (94) 月氏国王與三智臣作善親友縁（月氏国王が三人のかしこい臣と親友になるはなし）
- (95) 拘尸弥国輔相夫婦惡心於仏即化導得須陀洹縁（拘尸弥国の宰相夫婦が仏に悪心を抱き、仏が教化して須陀洹の境地を得させるはなし）
- (96) 仏弟難陀為仏所逼出家得道縁（仏の弟子難陀が仏にせまられて出家し道を得るはなし）
- (97) 大力士化曠野群賊縁（大力士が広野の群盗を教化するはなし）
- (98) 輔相聞法離欲縁（宰相が法を聞いて欲から離れるはなし）
- (99) 尼乾子投火聚為仏所度（尼が火に身を投じ仏に救われるはなし）
- (100) 五百白鴈聽法生天縁（五百羽の白ガチョウが法を聞き天にうまれ変わるはなし）
- (101) 提婆達多放護財醉象欲害仏縁（提婆達多が護財醉象を放ち仏を傷つけようとするはなし）
- (102) 迦拘延為惡生王解八夢縁（迦拘延が悪生王の八つ

の夢を解くはなし)

- (103) 金猫因縁 (金猫のはなし)  
 (104) 悪生王得五百鉢縁 (悪生王が五百個の鉢を手に入れるはなし)  
 (105) 求毘摩天望得大富縁 (毘摩天に富豪になれるよう求めるはなし)  
 (106) 鬼子母失子縁 (鬼子母が子を失うはなし)  
 (107) 天祀主縁 (天祀主のはなし)  
 (108) 祀樹神縁 (樹神をまつのはなし)  
 (109) 婦女厭欲出家縁 (女人が出家をいとうはなし)  
 (110) 不孝子受苦報縁 (不孝な子が苦しみのむくいを受けるはなし)  
 (111) 難陀王与那伽斯那共論縁 (難陀王と那伽斯那が論争するはなし)  
 (112) 不孝婦欲害其姑反殺其夫縁 (不孝な嫁が姑を殺そうとして夫を殺すはなし)  
 (113) 波羅奈王聞塚間喚縁 (波羅奈王が塚の中で呼ぶ声を聞くはなし)  
 (114) 老比丘得四果縁 (老比丘が四果を得るはなし)  
 (115) 女人至誠得道果縁 (女人が誠実さゆえに道果を得るはなし)  
 (116) 優陀羨王縁 (優陀羨王のはなし)  
 (117) 羅摩羅因縁 (羅摩羅のはなし)  
 (118) 老婆羅門問詭偽縁 (老婆羅門がにせのへつらいを問うはなし)  
 (119) 婆羅門婦欲害姑縁 (婆羅門の妻が姑を殺害しようとするはなし)  
 (120) 烏梟報怨縁 (烏とふくろうがうらみをはらそうとするはなし)  
 (121) 婢共羊鬪縁 (下女が羊とけんかするはなし)

それでは以下『雑宝蔵経』の言語の実態を見て行こう。長尾'79において『百喻経』について考察した。『百喻経』は492年訳で『雑宝蔵経』訳出時と20年あまりしか離れておらず共通する部分も相当存在する。あわせて参照して頂ければ幸いである。なお本稿では長尾'79である程度ふれているところは叙述を簡単にした。

## 1. 疑問文

### 1.1. 疑問詞

疑問詞は『百喻経』と同じく「誰」「阿誰」「何」「何等」「何物」「云何」などがあらわれる。「何等」「何物」の例を見てみよう。

汝欲求何等 (14)

(おまえは何を求めようと思うのか)

汝須何物, 而射於我 (10)

(おまえは何を求めようとして私を射るのか)  
 「阿誰」は次の一例が見られた。

仇伽離問言「汝是阿誰」 (28)

(仇伽離がたずねた「おまえはだれだ」)

### 1.2. 文末の不

牛島'67には『史記』にみられる, 文末に「～不」「～未」「～乎」「～耶」がつけ加わることによってできる疑問文があげられている<sup>2)</sup>。これらの例はいずれも時代の下った『雑宝蔵経』にも見出せる。その中でも唐以降の「～無」のかたちに関連し, 現代語の「～嗎」の前身ではないかと推測される「～不」の例が注目される。たとえば

汝先有父母不 (21)

(お前は前に父母がいたのかね)

而今此食, 称適意不 (102)

(今のこの食物は気に入ったかね)

のように平叙文末に「～不」を置くと, 他に何の操作を加えなくともただちに疑問文になるところは「～嗎」に類似している。吉川'49に指摘されているように, この「～不」は魏晋の文献では「頗～不」のかたちで「頗」と呼応して用いられている例が多い<sup>3)</sup>。『雑宝蔵経』の例,

今此獄中頗有受罪如我比不 (7)

(いまこの獄に私ぐらいの罪のある者がいくらかでもいるか)

汝今頗知故宅処不 (21)

(あなたはもとの家の場所をすこしでもおぼえていますか)

我今有妙, 意欲相施, 頗能食不 (40)

(いま私は麦粉菓子を持っておりこれを施そうと思います。すこしでもあがりますか)

頗有妙法可生天不 (119)

(天に生まれ変わることのできるような方法がすこしでもあるのかね)

頗有方便可得取不 (94)

(〔指環を〕取り出すことのできる方法がいくらかでもあるのかね)

この「頗」は「スコブル」ではなく「ヤヤ」と訓読し, 「すこしでも」「いくらかでも」と訳すべき語である<sup>4)</sup>。

### 1.3. 不審

『雑宝蔵経』には後代にも用いられる「不審」

(～だろうか、～かしら) という語が見られる。これも疑問表現の一つである。

不審尊者何緣微笑 (91)

(尊者はどうしてほほえまれたのでしょうか)

不審往昔生死之苦，其事云何 (92)

(昔の生死の苦しみとはどのようなことなのでしょう)

不審此鉢，為自然出，為有從來 (104)

(この鉢はひとりでに出て来たのか、それともどこかから持って来たのか)

不審今者為当取不 (104)

(いま〔鉢を〕受け取ったものかどうか)

この「不審」は他の疑問表現とともに用いられる。

(91) (92) はそれぞれ「何」「云何」という疑問詞とともに、(104) の第一例は「為～，為～」という選択疑問表現と、第二例は「～不」をともなう疑問文中にというふうである。

#### 1.4. 那

「なぜ、どうして」をあらわす「那」は魏晋からの文献に用いられている。『雑宝蔵経』には次の二例が見られる。

母已許我，那得復遮 (7)

(お母さんはすでに私〔が行くこと〕を許しておいてどうしてまた引きとめるのですか)

今汝獼猴破乱我国，那得不帰 (96)

(おまえたちサルは私の国をうちこわし混乱させている。どうして帰らないのか)

この例もそうであるが、疑問の「那」は「得」あるいは「可」を後にともなって用いられており、「那得，那可」でそれぞれ一語のように使用されることが多い。そして「得，可」は「～できる」という可能の意味がうすらぎ、「那」に附加されているだけのような用例は『世説』にも見出せる。

那得初不見君教兒 (世説・德行)

(どうしてあなたが、子供を教えているところを決して見るができないのでしょうか)

此手那可使善賊 (同，雅量)

(これほどの腕前ならばどうして賊を近づかせようか)

#### 1.5. 為，為当

この時代の文献には「為，為復，為是，為当」などの「為」をともなった疑問文がみられる。これらの語は「為～，為～」 「為是～，為是」 「為

当～，為当～」 「為当～，為～」 というかたちになり一種の選択疑問として用いられることがある<sup>9)</sup>。『雑宝蔵経』にも前出1.3. (104) 第一例のように「為～，為～」のかたち、(104) 第二例のように「為当」が見られる。その他にも「為～，為～」の例がある。

我弟弗那，為得生活，為貧苦耶 (49)

(私の弟の弗那はちゃんと暮らしているだろうか、それとも苦しい暮らしをしているだろうか)

#### 2. 得

「得」は古来より現代にいたるまで多用される基本語の一つである。唐以降は現代語の「这个菜吃得」のように動詞に後置されて可能をあらわす用法が発達した<sup>9)</sup>。五世紀後半の言語にはこの用法はほとんど見られない。しかし「得」が単独で、あるいは動詞に前置されて可能をあらわす用法は古くから存在した。牛島'67 では『史記』の「得」をまず獲得と可能とに分類して例を挙げている<sup>7)</sup>。

<獲得 の例>

文侯由此得挙於諸侯 (魏世家)

(文侯はそのことによって諸侯の間に名声をはせた)

<可能 の例>

田横亦得収斉 (項羽本紀)

(田横も斉の国を手に入れることができ……)

莊不得擊 (同上)

(項莊は斬りかかることができなかった)

『雑宝蔵経』に見られる獲得の例を見ると

先因売薪，適得三錢 (103)

(以前に薪を売って三錢を手に入れた)

周遍天下七日之中，推求不得 (106)

(天下をあまねく七日間さがし求めたが見つめることはできなかった)

この獲得の意の「得」は、文字通り「手に入れる」という意の「獲」とあい呼応して用いられることがある。

得阿羅漢，獲六神通 (11)

(阿羅漢〔の境地〕を得，六神通〔の能力〕を得た)

獲得の「得」が他の動詞に後置され二音節となる例には「索得」(1) 「捕得」(3) 「拾得」(41) 「捉得」(83) などがあり、このつながりは形態

的には唐以降に急増する可能表現の用法を準備するものと考えられる。『史記』には「生得」「追得」「探得」「破得」「捕得」「逐得」「逢得」が見られるという。(牛島'67, 117頁)

可能をあらわす例には次のようなものがある。

我弟弗那，為得生活，為貧苦耶(49—既出)

以出家功德，當得生天(96)

(出家の功德によって天に生まれ変ることができらる)

手自然直，不得屈伸(8)

(手がひとりでにまっすぐになり曲げたり伸ばしたりできない)

この「得」が「能」や「可」とむすびついて「能得」「可能」となるかたちは訳経をはじめとする魏晉の言語の特徴である。

非但今日能得安立，乃於往昔已曾安立(11)

(こんにち安立することができるだけでなく、むかしすでに安立していたのだ)

盡其神力，不能得動(81)

(神力をつくしても動かすことができない)

以種種葉，塗不能得瘥(80)

(さまざまな葉を塗っても直すことができない)

この「能得」は同義の「能」と「得」が文体や句の字数をあわせることに応じて一文字のみが用いられたり、二文字に連用されたりするのであろう。たとえば

欲推令去，不能得離，脱衣雇人，使挽却之，亦不得離(50)

(〔首についた死人を〕押しはがそうとしても離すことはできない。衣服を脱ぎ、人をやとって引き離させようとしても離すことはできない)

国王聞之，亦来収刈，不能得盡。如是一切諸来取者皆不能盡(49)

(国王がそれを聞き、やって来て刈り取ったが刈りつくすことはできなかった。このようにしてやって来た人すべてが刈っても刈りつくすことができなかった)

この例をみると、(50)では「能得」と「得」が、(49)では「能得」と「能」がほとんど同じような意味、用法で用いられることがわかるであろう。このほか『雑宝蔵経』にはすべてが可能表現と言いつけることはできないかも知れぬが、つぎの各篇に「能得」の表現があらわれる。

(10) (15) (33) (34) (36) (59) (70)

(80) (81) (91) (95) (96) (97) (106)  
「可得」とつらなって可能をあらわすかたちには次の実例がある。

分布香水，而起塔廟，可得除災(77)

(香水をまき、仏塔を造れば災厄を除くことができる)

頗有方便可得取不(94—既出)

牛島'67にはさらに願望をあらわす「得」の用法が挙げられている。

陳軫曰：……臣清得譬之(楚世家)

(陳軫が言った。……たとえばなしをさせていただきたいと存じます)

『雑宝蔵経』にはこの「得」がやはり願望をあらわす「欲」の後に連なって「欲得」となり「～したいと思う」という意で用いられる例がある。

即便拔劍，欲得殺婦(2)

(すぐに劍を抜き妻を殺そうとした)

常欲見仏欲得聞法(73)

(いつも仏にお会いして説法を聞きたく存じます)

### 3. 与

長尾'69で、現代語「給」の前身となる「与」が動詞と密着して「V与」のかたちになる変遷の過程を見たが、『雑宝蔵経』にも、「V与」の例および、直接目的語が「V」と「与」には含まれている例とがある。

<V+O<sub>1</sub>+与+O<sub>2</sub>—の例> (O<sub>1</sub>は直接目的語)  
(O<sub>2</sub>は間接目的語)

分肉与其兄嫂使食(22)

(肉をあによめに分けてやり食べさせた)

日以宝鉢送食与舅(104)

(日々宝の鉢で食物をしゅうとにあげた)

<V与の例>

若得食時，分与二人(102)

(食物を得ると二人に分け与えた)

以飲残酒，送与夫人(17)

(飲みのこしの酒を夫人に与えた)

このほか「V与」の例には「付与」(21)「売与」(43)「脱与」(43)「授与」(50)「封与」(77)「過与」(96)「施与」(104)などがある。この時代は「与」はまだ助動詞的性格は持っておらず「V与」は動詞の連用と考えられるが、獲得の意の「V得」の場合と同様に現代語の「V給」とい

う表現につらなって行く用法成立の条件を作っているものと思われる。

#### 4. 著

『雑宝蔵経』に用いられる、「著」には「(着物などを)身につける」という意味で用いられる場合と「置く、附着する」の意を持ちつつ後に場所をあらわす語をとまなうやや複雑な用法とがある<sup>8)</sup>。前者の「身につける」意の例を見てみよう。

以帛結髮，頭著天冠(1)

(絹で髪をしぼり，頭に冠をかぶって)

象問王言，著向衣服(10)

(象が王にたずねた「どの服を着ますか」)

後者の後に場所をあらわす語をとまなう用法のうち、「著」が単独で用いられている例を見てみよう。

我今但著瓶屋中(96)

(私はいま瓶を家の中に置くだけで)

以一蘗大甘蔗，著比丘鉢中(65)

(一本の質の悪いサトウキビを比丘の鉢に置いた)

つぎに「著」には、「得」「与」のように他の動詞に後置される「V著」という形がある。この形を準備する用法は動詞と「著」の間に目的語が入り

V+O+著+場所をあらわす語

という連結である。

作一密屋，置父著中(4)

(秘密の部屋を作り父をその中に置いた)

心懷憎嫉，擲彼蓮華所生之子，著河水中(8)

(心にくしみねたみを生じ，蓮華が生んだ子を河の中に投じた)

新作肆舍，請仏著中(72)

(新たに店を作り仏に請ふて中に入れた)

推求毒藥著飲食中，請仏欲与(98)

(毒薬を求めて食物に入れ仏に与えようとした)

婢縁急故，用所取火著羊脊上(121)

(下女はあわてて手に持った火を羊の背に着けた)

そして間にはさまれている目的語が動詞Vの前に置かれたり，省略されたりして「V著」の形が生ずる。後にはやはり場所をあらわす語が来る。

昌犯王法，藏著地中(4)

(王の法をおかして地中にかくす)

有小余残，瀉著河中(102)

(すこしばかりの余りを河の中に空けた)

還以鑰匙，繫著腰下(20)

(さらにカギを腰に結びつけた)

商主即以船宝，投著水中(99)

(商人はただちに船の宝物を水の中に投げ捨てた)

我捉汝脚，擲著海外(81)

(私はおまえの足を持って海の外に投げる)

『雑宝蔵経』にはさらに、「盛著」(9)・「勝著」(14)・「敷著」(15)・「墮著」(22)・「請著」(27)・「拳著」(42)・「貪著」(95)・「集著」(99)・「送著」(100)・「盛著」(106)などの「V著」のかたちが見られる。

大田 '58 ではさらに「著」が後に場所をあらわす語をみちびくことについて「在」との類似性を指摘している。「附ける，置く」という義をもつところからこのような類似性がでてくるのであろう。次の「在」の例などは「著」の用法に酷似している。

酒吐在地(92)

(酒を地にはく)

場所をみちびく介詞としては「在」よりも「於」を用いる方が多い。次の例などは同一篇の中で「著」と「於」が全く同じかたちで用いられている。

④ 我捉汝脚，擲著海外……

我捉汝脚，擲於海外(81—既出)

⑤ 截其手足，擲著道頭……

被刖手足，擲於道頭(84)

(手足を切って道にすてる……

手足を切られて道にすてられる)

#### 5. 代名詞

基本的な人称・指示代名詞は『百喻経』と全く同じである。すなわち，一人称代名詞は「我」，二人称代名詞は「汝」「爾」，指示代名詞は「彼，此，其，他」であり，「彼，他」は人称代名詞としても用いられる。人称代名詞を複数にするときには「～等」を加える。

このほか少数ではあるが臣下が王にたいするときに用いる一人称「臣」，その複数「臣等」，目下の者を呼ぶ二人称「卿」，その複数「卿等」，僧侶の一人称「貧道」が見られる。(これらは『百喻

経』には見えない)

大王若能<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>臣語者 (94)

(大王がもし私のことばを採用されるならば)

臣等<sub>レ</sub>斯下, 智慧愚浅 (93)

(わたくしめ等はおろかで知恵がありません)

卿今<sub>レ</sub>責我無所得也 (93)

(おまえは何もうるところがないと私を責めるのか)

卿等<sub>レ</sub>不解此耶 (93)

(おまえたちここを解くことができないのか)

貧道<sub>レ</sub>今者未堪<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>王作福田也 (93)

(愚僧は今はまだ王のために福田を作ることはできません)

## 6. 二音節語と二字連語

『雑宝蔵経』は『百喻経』の四倍近い分量がある。したがって二音節語、二字連語もはるかに種類が多く、『百喻経』に見られるものは大体において見出すことができる。しかし中には『百喻経』にのみあって『雑宝蔵経』には見られないという語もいくつかは存在する。たとえば「要当、要須」「理自、唐自、虚自、空自」などである。以下本項では順に二音節語、二字連語を見て行くが、『百喻経』に見られる語については一部をのぞいて単語のみをあげて指摘すると、どめ『雑宝蔵経』に見られる語について例文をあげることにする。

### 6.1. 即, 便

「即, 便, 即便, 遂便, 輒便」のほかに「即便」が顛倒した「便即」(すなわち), 「尋便」(すぐに), 「後便」(のちに), 「各便」(おのおの)がある。

便即<sub>レ</sub>下村, 選取財宝 (119)

(すぐに木からおりて宝物をえらび取った)

即以鉄叉, 打童女頭, 尋便<sub>レ</sub>命終 (7)

(鉄のさすまたで童女の頭を打つとすぐに死んでしまった)

得食歛喜, 後便<sub>レ</sub>命終 (68)

(食物を得てよろこび, のちすぐに息を引きてしまった)

情不和合, 各便<sub>レ</sub>分活 (88)

(気持が合わず各々わかれて暮らした)

### 6.2. 時

「時」をともなう語。「時即」以外は「～時」のかたちをとる。「即, 当, 向, 随, 尋」が「時」の前に来るほか, 「同時」(いっしょに), 「後時」(のちに)がある。

諸歛慶事, 同時<sub>レ</sub>集会 (77)

(さまざまな慶事が一斉にひらかれた)

其父<sub>レ</sub>後時<sub>レ</sub>寿盡命終 (108)

(父はのち寿命が尽きて亡くなった)

### 6.3. 自

#### 6.3.1. 即自, 便自, 既自

「自」が接尾語的になって、他の語のあとにつらなるもののうち「即自」「便自」系統のものとしては他に「既自」(～であるからには)がある。即自無罪受斯禍患 (117)

(罪がないのにこのようなわざわいを受けるからには)

#### 6.3.2. 躬自, 身自, 独自, 心自, 親自, 手自, 私自, 各自

「自」は単独で「みずから」の意で用いられる。この原義に関連を持ち易い語は「～自」の形の連結を作りやすい。すなわち, 「躬自」「身自」(みずから), 「独自」(ひとりで), 「心自」(心に), 「親自」(みずから), 「手自」(手ずから), 「私自」(ひそかに), 「各自」(おのおの)などの語である。

王与長者, 躬自<sub>レ</sub>出迎 (86)

(王と長者がみずから出むかえた)

留衆在後, 身自<sub>レ</sub>独往 (1)

(みなをのこして自分一人で行った)

唯此王女, 独自<sub>レ</sub>不来 (20)

(この王女だけが来ない)

心自<sub>レ</sub>思惟必有毀謗於我 (27)

(だれかがきつと私をそしったのだろうと思った)

今日我親自<sub>レ</sub>生天 (73)

(今日は私みずから天にうまれかわる)

時長者子, 手自<sub>レ</sub>行食 (48)

(その時長者の子は手ずから食をすすめた)

私自<sub>レ</sub>思惟, 彼人先世修福, 今日富貴 (41)

(あの人は前世に福をおさめたから今富貴になっているのだろうとひそかにおもった)

各自<sub>レ</sub>陳謝, 称不能別 (4)

(おのおのが区別はできぬとことわりを言った)



## 6.3.3. 徒自, 素自, 而自, 深自

その外『百喩経』に見られる「徒自」以外に、「素自」(もとより)「深自」(深く)がある。素自殷富, 尊者到家, 财宝豊溢殊勝於前 (116) (もともと富裕だったのに, 尊者が家に来ると財宝は前にも増して豊かになった) 此三人等, 深自慚愧 (73) (この三人は深く恥じている)

## 6.4. 当, 応, 須, 宜, 必, 定

「～すべきだ」「きつと～だ」という表現には、『百喩経』と同じく「応当, 宜応, 当須, 必当」がある。『雑宝蔵経』に見られるものとしては「必定」がある。

若我去者, 必定多得 (119)  
(もし私が行けばもっと多く手に入る)

## 6.5. 復

「また」の意で同義の他の字と連用されたり、接尾辞的に用いられる「復」は『百喩経』に見られる「尋, 况, 還, 便, 亦, 又」+「復」のほか、「即復」(すぐに, すなわち)「遂復」(そこで, そうして)「重復」(かさねて)「更復」(さらに)「倍復」(さらに)「竟復」(いったい)「雖復」(～だけれども)「設復」(もしや)などがある。

亦於路中, 見舍利仏, 目犍連等, 即復与之 (69)  
(路上で舍利仏, 目犍連などに会い, ただちにそれを与えた)

遂復作会, 貧長者子, 猶故如前 (20)  
(そこでまた会を設けたが, 貧しい長者の子は以前通りであった)

重復来索, 更不与汝 (50)  
(これ以上やって来て求めてももうお前にはやらない)

我婦死去, 更復無婦 (96)  
(私の妻は死んでしまい [この女人以外に] 女人はもういない)

見仏在中, 倍復慶悦 (99)  
(仏が中に居るのを見てますますよろこんだ)

汝取此穀竟復為誰 (3)  
(おまえはこのもみを取った。いったい誰のためにしたのだ)

雖復奉事百千天神, 欲求於菓, 菓不可得 (105)  
(百千の天神に奉納して実を取ろうとしても手

に入れることはできない)  
設復有人得十万車金, …… (50)  
(もしだれかが十万台分の金を得たとすると, …)

## 6.6. 善能

「よく, ちゃんと」の意「善能」には次の例が見られた。

如来善能分別此珠, 復能説法 (79)  
(如来はこの珠をちゃんと識別できるし, 法も説くことができる)

## 6.7. 皆

「みな」の「皆」を含む語には「悉皆」「尽皆」以外に「皆共」がある。

諸彌猴衆, 皆共追逐 (96)  
(サルたちはみなで追いかけた)

## 6.8. 却後, 然後, 其後, 隨後

「～ののち」という意味で「後」一字が用いられるときには、「時間をあらわす語」+「後」となる。たとえば、

是比丘知, 七日後, 必当命終 (46)  
(この比丘は七日のちにきつと死ぬのだということを知った)

「却後」を用いて、このような表現をするときには「却後」+「時間をあらわす語」となる。

却後七日, 天当雨土滿其城内 (116)  
(七日のちに天は土を降らせて城じゅうを一杯にしようだろう)

西谷<sup>58</sup>では「却後」のあとにはきまって「時間を具体的にあらわす語が来る」とし、長尾<sup>79</sup>で見た中古期の例はすべてこの指摘どおりであったが、次の「却後」の例はこれらとはすこし異なっている。

却後寿尽, 得生天上, 来向仏辺 (60)  
(のち寿命がつき, 天にうまれ変わって仏のところに来た)

「寿」は時間をあらわす語と言えないこともないが「七日, 劫」などとは同質ではない。この「寿尽」をともしう語にはその他「其後」が用いられることがある。

貧女其後寿尽命終生於天上 (61)  
(貧しい女はのち寿命がつきて天にうまれ変わった)

また現代語にも用いられる「隨後」(すぐあとで)の例も見られた。

即擲其鉢，著虚空中，隨後飛去（40）  
 （虚空にその鉢を投げて置き，そののち飛びさった）

## 7. 重複形式

名詞のAA型重複形式は逐指をあらわす場合に用いられる。『百喻経』で見た「日日」以外に、「世世」（世ごとに）「処処」（あちこち）「事事」（ことごとに）「歩歩」（一步一步）などがある。

我由拔母，世世無難（5）  
 （私は母をたすけ出したのでいつの世でも災難にあわぬ）

生嫉妬心，処処誹謗（37）  
 （ねたみの心を生じ，あちこちで悪口を言った）

長者聞其，事事皆能，即雇使作（48）  
 （長者はなんでも皆できると聞いて，すぐに雇って働かせた）

当還家時，歩歩歡喜（103）  
 （家に戻るとき，歩くたびに喜んだ）

また、「漸漸」（だんだんに）、「数数」（しばしば）は形容詞のAA型と思われる。

漸漸長大，極敬袈裟（10）  
 （だんだんと大きくなり袈裟を大へんうやまうようになった）

到彼山中，数数請兄（1）  
 （あの山の中へ行ってしばしば兄にたのんだ）

「索索」（おそれるさま）、「孜孜」（いそしむさま）——用例省略——は古代語式の用法で純粹の重複形式ではない。「惕惕」（どきどき）「噉噉」（がやがや）「啞啞」（めえめえ）などはオノマトペである。

我乳亦惕惕而動（2）  
 （私の胸はどきどきと動いています）

含氣噉噉，人畜憤結（95）  
 （いかりをもって打ちさわぎ，人も獣も憤慨しております）

羊便啞啞笑而言曰（108）  
 （羊はめえめえと笑って言った）

## 8. 量詞

『百喻経』に見られる「枚」「頭」「両」「下」のほかに，次のものがある。

〔張〕 「ひらたいもの」をかぞえるとき用いる。  
 即以上妙好氈二張，施舍利弗（78）

（そこで上等の毛布を二枚舍利弗にほどこした）

〔根〕 草，木など根のある植物をかぞえるときに用いられていたが，そこから意味が推し広められて，木を数えるところから「木製のもの」を数えたり，植物以外の「根のあるもの」をかぞえたりするようになった<sup>9)</sup>。次の例は後者に該当する。  
 絶母数十根髮（7）

（母の数十本の髪を切った）

〔乘〕 車やふねを数える。  
 門外忽然有五百乘車（104）

（家の外にとつぜん五百台の車があらわれた）

〔升，斗〕 穀物などの量をはかる。  
 為人肆力，得麩六升（40）

（人のために働いて小麦粉六升を得た）

客作傭力，得三斗米（23）  
 （人にやとわれて働き米三斗を得た）

〔丈，斤〕 長さ，重さの単位。  
 但為我作百丈之台（9）

（ただし私のために百丈の台を作って下されば）

此大白象有幾斤兩（4）  
 （この大きな白象は何斤の重さがありますか）

〔掬〕 両手で持つものをあらわす<sup>10)</sup>，  
 以一掬水，多於大海（4）  
 （両手ひとすくいの水が大海より多い）

〔鉢，釜〕 食器，炊事用具をあらわす名詞が量詞に転じたもの。

我見瞿曇施一鉢飯，得如是報  
 （私は瞿曇をみて一鉢のめしを施したのでこのような報いを得たのです）

為提婆達多，日送五百釜飯（37）  
 （提婆達多のために日々釜五百ぶんのめしを送った）

〔匝〕 物のまわりをまわる回数をかぞえる動量詞<sup>11)</sup>。

遶我舍七匝（8）  
 （私の家のまわりを七回まわれ）

## 9. その他

それでは最後に順不同となるけれども，後代の口語に連なってゆく，注目に値するような表現をいくつか見てみよう。

### 9.1. 受動態

受動態は大体において古代語式の表現が多いが、次の例は「主語+被+人+動詞」という中古以降のかたちである<sup>12)</sup>。

- 又復過去忍辱仙人被他刖耳鼻手足，猶尚能忍(24)  
 (またむかしには忍辱仙人が他の者に耳，鼻，手足を切りとられてもまだ耐えしのぶことができた)  
 如来被迦陀羅刺(80)  
 (如来は迦陀羅に刺された)

## 9.2. 縦使，仮使

「たとえ〜でも」をあらわす口語的表現の「縦使」は一例のみ見られる。この語は牛島 '67, '71には「縦」として見え、「使」をともなうかたちは『史記』『世説』等には用いられていない。また、同系統の「仮使」もあるが、これは古くから用いられていた語である。

- 縦使失諸比丘衣物，我饒財貨足有可償(96)  
 (たとえ比丘たちの服や物がなくなっても、私には十分弁償できるだけの財産がある)  
 仮使是狗，猶尚不辭(20)  
 (犬でありましようともお断わりいたしません)

## 9.3. 子，頭，辺，裏

名詞接尾辞の「子」はこの時代の特徴として動物につけられる。『雑宝蔵経』にも少数だがその例がある。

- 時聚落中，有一猫子(35)  
 (その時村に一匹のネコがいた)  
 而取蟻子，置高燥处(44)  
 (アリを取り上げて高いかわいたところに置いた)  
 私於城辺，見餓鬼子(91)  
 (私は城のそばで餓えたオニを見た)  
 「頭」は方位，場所をあらわす接尾辞で，強いて訳せば「〜のあたり，〜のところ」となるうか。解此義已，還著王門頭(14)  
 (この問題を解いて王の門に貼りつけた)  
 常於道頭，乞索自活(68)  
 (いつも道で物乞いして生活していた)  
 指田頭樹，語諸子言(108)  
 (田の木を指さして子供たちに言った)  
 「そば，かたわら」をあらわす「辺」はやはり魏晋から用例がみられる。『雑宝蔵経』にも多数見出せる。

- 雪山辺有一仙人(8)  
 (雪のある山のかたわらに一人の仙人がいた)  
 至河岸辺，而語夫言(22)  
 (河のほとりに行き夫に言った)  
 「なか」をあらわす「裏」も現代語代の用法は魏晋以降の文献にみえる。  
 須臾之間，金頭金手滿其屋裏(50)  
 (たちまち黄金の頭，黄金の手が部屋じゅうに満ちた)  
 漢以前にも広く用いられている「中」も「裏」とまったく同じかたちで用いられる。  
 大兄捉一団，著仏鉢中……第二復以歡喜団著仏鉢裏(49)  
 (長男が一つの団子を仏の鉢の中に入れ，……つぎにまた歡喜団子を仏の鉢の中に入れた)

## 10. 終りに

言語の歴史を考察するときには常に口語の太い底流の存在を念頭に置いていなければならない。この太い底流は社会の変化につれ，さまざまに屈曲しながらも人間のいる限り流れつづけた。文章化された言語はこの底流のごく一部分を文章のかたちで露出させているだけである。文章は書かれてから永い時間を経て，多くのものは散佚し，そのごく一部が文献として残されているにすぎない。吉川'49では<sup>13)</sup>『世説新語』を代表とする魏晋南北朝の文章はそれ以前にくらべて助字が多用され，そのことによって文章がゆるやかに，なめらかになり，余裕がうまれている，と説く。そして「世説に始めてあらわれる新語法は，口語としては遅くも後漢には盛んに使われていたと考えねばならない」とも言う。すなわち，太い口語の底流は前漢・後漢と若干はすがたを変えつつも魏晋に流れ入ったと見る。魏晋にいたって前代にくらべ言語は大きく変貌したように見えるが，口語の流れが根本的に変化したのではなく，『史記』『漢書』を媒介として露出している口語の流れが，魏晋以降ではより大きく露出した，と考えるべきである。文章史としての観点からだけすれば文章が変わったと言うだけでよいが，言語の歴史という点から見るとそれだけでは不十分である。

吉川'49では魏晋以降助字をつかう新方式の文章が増えてきた(筆者流に言えば，口語底流の露出部分が大きくなって来た)理由には，哲学談義

の盛行により「自、本、正」などの事象のありようを吟味する助字が多く使われたこと、四六文の流行により、四字、六字に字数をととのえるため、叙述の結論に影響をおよぼさぬ助字が採用されたことであるという<sup>1)</sup>。筆者はこれに加えて、詩・小説・文学評論などの盛行と発達も「底流の露出」にあずかって力があつたものと考え。文学作品を創造するときにはよりよい表現を求めてその時代の言語を仔細に吟味し最も適当な語彙をつらねて文章を作ったり、従前の慣習にとらわれずより新鮮なことばを使おうとしたりするはずだからである。さらにもう一つの大きな理由は言うまでもなく仏教の流入と訳経事業である。外国から来た訳経僧たちは、外国語として中国語に接し、習得して行くと共に、サンスクリット語や西域諸語をいかに適切な中国語におきかえるかということに腐心し、中国人の僧侶も中国語をもう一度客観的に見なおし、口語の豊かな表現力を再認識したであろう。また、布教という目的からしても大多数の字の読めぬ大衆のことを考えれば従来まで用いられていた、口語の断片を記した文章のわくを大きく乗り越えて行く必要があつた。

本稿では魏晋南北朝期の言語の実態を明らかにする試みの一つとして『雑宝蔵経』の文法的特徴を見て来た。この期の言語はまだそのごく一端が明らかになったにすぎず残された仕事も多い。しかし近來『弘明集研究』『法華経一字索引』『維摩経・勝鬘経一字索引』『高僧伝索引』などの研究工具も発行されており、これらをふまえてさらに一段飛躍することが今後の課題であろう。

### 注

- 1) 岩本'78によればジャータカ(jātaka)は「本生」と訳され、ブッダの前生物語であり、最後の連結部分で「その時の何某は実はわたしであった」とブッダがいう。アヴァダーナ(apadāna)は1.過去物語に登場する誰かをブッダみずからが自分に比定することはない。2.現在物語の主人公はブッダの弟子または信者。3.過去物語には過去仏の名がみられる。ここで、アヴァダーナには「今生においてブッダとなるべきものが見られない」という。そして後代においては両者は混淆してしまうとのことである。
- 2) 牛島'67 323頁。
- 3) 吉川'66 127頁。
- 4) 『文語解』に「古来スコブルト訳スソノ義ヲシラズ。

ヤマト訳シテヨク通ズ」とある。中村'76 103頁。

- 5) 森野'75, 213~218頁参照。
- 6) 牛島'67 122頁。
- 7) 内田'53, 太田'58 229頁参照。
- 8) 著の用法については志村'72参照。
- 9) 劉'65, 95頁参照。
- 10) 同前, 243頁参照。
- 11) 同前, 264頁参照。
- 12) 太田'58, 244頁, 長尾'72 112頁参照。
- 13) 吉川'66「世説新語の文章」参照。
- 14) 長尾'72, 113頁, 長尾'79 117頁参照。

### 参考文献

- 長尾 光之 1969「与と給の問題点」『集刊東洋学』21  
1972「鳩摩羅什訳『妙法蓮華経に見られる六朝期中国の口語』福島大学教育学部『論集』24号の2(人文科学)  
1979「中国語訳『百喻経』の言語」同前31号の2
- 吉川幸次郎 1949『中国散文論』弘文堂。  
1966 再版, 筑摩書房
- 劉 世儒 1965『魏晋南北朝量詞研究』中華書局
- 内田 道夫 1953「中世中語における“得”の特質について」『東北大学研究年報』2
- 牛島 徳次 1967『漢語文法論(古代編)』大修館書店  
1971『 “ ” (中古編) “ ”
- 森野 繁夫 1975「六朝漢語の疑問文」『広島大学文学部紀要』第34巻
- 太田 辰夫 1958『中国語歴史文法』江南書院
- 岩本 裕 1978『仏教説話の源流と展開』(仏教説話研究第2巻)開明書院
- 西谷登七郎 1958「六朝訳経語法的一端」『広島大学文学部紀要』14
- 志村 良治 1972「著について」『鳥居久靖先生華甲記念論集・中国の言語と文学』所収
- 中村 幸彦 1976『釈大典 文語解 詩語解 並に索引』

\* \* \*

- 『弘明集研究』上中下 1975 京都大人文学研究所  
『法華経一字索引』 1977 東洋哲学研究所  
『維摩経・勝鬘経一字索引』 1979 “ ”  
『高僧伝語彙索引』 1979 森野繁夫編

Some Grammatical Features in  
Za-bao-zang-jing (雑宝蔵経)

Mitsuyuki NAGAO

Contents

- |                   |                                       |
|-------------------|---------------------------------------|
| 0. Introduction   | 6. Disyllabic Adverbs Auxiliary Verbs |
| 1. Interrogatives | Conjunctions                          |
| 2. On de (得)      | 7. Reduplicative Forms                |
| 3. On yu (与)      | 8. Classifiers                        |
| 4. On zhe (著)     | 9. etc.                               |
| 5. Prenouns       | 10. Conclusion                        |